

ジャン・ジオノ

## 『オデュッセイアの誕生』序章

梅比良眞史・訳

「汝とおなじようにさえずる術を心得ている海よ」

カリユプソーが言ったか言ったに違いないことば……

ロンサール

湿った砂のうえに這いつくばって、オデュッセウスは眼を開いて空を見た。—— 空しかない。空の下では、陸地の生気を失った肉体が抜け目のない海の水に交わっている。

不実な海はひそかにホーホーと鳴いていた。そのぶよぶよした緑の唇が引きもきらず、獐猛な口づけを、岩礁の堅い顎に浴びせていた。

彼は立ち上がろうとした。腿に海藻。腕には、波の飛沫の水煙が。もはや瞼しか自由がきかなかった、瞼は悲嘆にくれた空にむかって開かれていた。彼は目を閉じた。—— 絶望が彼の臓腑を蝕みはじめた。

小さな足のパタパタという音がした、次いで歓声が、その叫びは

あまりにも人間的だったので花が咲いたかのようなだった。

いくつもの声が彼の身体の上を飛び交っていた。彼の皮膚が、舌先の捏ねあげる生暖かい息づかいを聞いていた。彼は少し瞼を上げた。剥き出しの腿に囲まれていた。彼の視線は一巡し、それから脚に沿って上った。鋤を使う力で抉られたひかがみ、そして太腿……体毛のない両のひかがみが貫頭衣のなかへと立ちのぼり、青い陰に覆われた両の腿があった。

彼の視線は段々と上った、胸だ。女だった。

彼は引き起こされると、少し向こうに、また別の漂着物のまわりにひしめく人々を見た。

崖上の草叢にそのアルキノオスが引き揚げられていた。彼は折れたマストにしがみついて、砕け散った小帆船から逃れてきたのだった。

彼は海豹のように手足をバタつかせ、唸っていた。硫黄色の古傷が額で光っていた。口調の激しさが髭を揺らし、唾液と海水の飛沫をあげてほとばしる、その言葉の強さに、運んできた者たちは、啞然として、それでも礼を失しないように、担架を降ろして逃げられる手だてを探していた。

というのは、スケリエー門の前で打ち倒されたあの棍棒の一件以来、アルキノオスには神々が見えるという悲しい特権が授けられたのだ。雲の華や果樹園を渡る微風の力を借りずとも、彼はいつも神々のなかで生きていたし、彼の唇からは、硫黄泉のように、凄ま

じい夢が流れ出ていた。

雛菊、実った麦、じゃがいも、と続く数珠繋ぎの長い日々のうちで、オデュッセウスはその女に三度出会った。

最初、彼女は踊りながら御柳の木の下を駆けていた。松林に入る前に顔を向けた。

それから、海での水浴び。彼が切り立った崖に囲まれた入江という入江を探し回って、ついに彼女が水浴びしていた入江を見つけた、だが彼女は彼を見ると水の中に潜ってしまい、青緑色の海に消えた。金色の泡の一房が重たげに彼女の後に続いた。

ついには、焼け付くような日の黄昏時、動きの止まった田園で。オデュッセウスが彼女の家の前を通りかかると、ついにもう一度彼女が見えた。彼女は扉の隙間から様子を窺っていた。彼女が笑った。彼女の微笑は不易の法をも覆す力を持っていた。地面が傾き、木々が、草々がオデュッセウスをその扉の方へ押しやり、扉が静かに開いた。彼は入っていった。その暗がりは涼しく、よい香りがして、果肉のように濃密であった。泉水の水管が喉を震わせていた。女はキルケーといった。

それが今では、漁船の鳴らす法螺貝の音が丘の狭い坂道に響くと、オデュッセウスはその家から村へと下っていくようになっていた。

港の酒場へ海のエロスへの扉を押した。そこで、船長《暗闇のダ

ンス》、店主ポチアデス、ヴィーナス号の乗組員、とても優しい類と、とても気詰まりな視線とを持った《ドラド》号の少年水夫たちに出会ったが、彼らはすべてキルケーの家で知り合い、以来愉快な友人であった。木のテーブルのうえで果てることのない骨牌ゲームの火花を散らしていた。

彼が海のエロスへに来るのも、酌をしてくれるかわいいリディアがお目当てだった。彼女は蛤と葡萄酒の香りを漂わせ、刺すような汗の匂いもオデュッセウスを狂おしくさせるのだった。ほかのものたちが出ていくと、彼女を膝の上に乗せて、撫でながら話をしてやるのだった……

話に詰まるということはない。

すでに彼は、豚を船に積んでピロスの港に運んでいたときから、女たちの跡を嬉々として追っていた。あるときは自分を流離の王、あるときはまた猛獣の狩人だと言っていた。神にさえなりすまして、イリアの地、ムサリオンの森の穴の中で羊飼いの女を襲ったこともあった。

夜の帳が下りるころ、彼はキルケーの家にまた登って帰っていた。玄関先では、口づけされ、引っ掻かれて、手荒い歓迎が待っていた。

はりえにしだの中に寝転んで、アルキノオスは薄笑いを浮かべていた。ほろほろ鳥たちの鳴き声に似た小さな笑いだった。彼はオデュッセウスを引き留め、そして、海を示して、言った、

「どうだ、松林にすっぽり覆われた島々を覚えているかい、よくその島々の間をぬって駆け回っただろう。それから瑠瑠びきの波の打ち寄せる暗黒の島を、そして我々を打ちのめしてくれたあの島を。石ころなんかじゃなく、雌の肉体でできているんだ、あの島々は。思い出したかい。近づいていくと、風の中を鳥たちがやってきて、そして芳しい匂いが、そのとき俺たちの神経がぴんと堅くなり、まるで乙女らが船底に体をこすりつけながら飛び出してきたかのようなだった」

そこからは、彼は自分自身に向かって話を続けた。しかしオデュッセウスは思い出していた。

「島巡りか、というより女巡りじゃなかったかな。船は港々のとりもちに引つ掛かりにはやって来た。色恋の呼ぶ声に抗うことができただろうか。まっすぐに歩こうとしても、足の間にキューピッドが駆け込んできては、足かせになり、葵の花の中に倒れ込むことになるのだ」

確かに、オデュッセウスの場合、転落は納得づくで起きていた。良心の叫びを押し殺す必要もさらさらなかった、そんな野暮な良心など、とうに飼い馴らされてしまっていた。

こうして、右に左にゆらゆらと、帆船は滑るように女から女へと

巡ってきたのだった。風があまりにも風いで海を破裂させたときとか、嵐の雌羊がその褐色の体毛を空に膨らませたときとか、あるいはただ、小さな女の子が通りの曲がり角で三度ほど振り返っただけで、オデュッセウスは舐い綱を引き出し、錨を投げ込み、帆をたたみ、岸壁に降り立ち、キューピッドに引きづられて行くのであった。彼の思い出のなかで、国々は女たちそのものだった。

西アジアの海岸に開いた河口、そこへ水を補給しに寄った彼らは、三つの季節が過ぎるまで居続けた。思い出の中で、そこはカリステと名付けられていた。葦原で彼がものにした若い娘の名前から付けられた。キラデス諸島の沖の山羊の孤島、これはティマレテだ、祭司の女房で、騒々しい譫妄状態にあったといえども自分の夫の前で身をまかせた大胆な女の名だ。そしてあの列島だ。それは恋人たちの名前を持っていた。オレー、リシア、メリテー、カリユプソー、そして幾多の、そしてあまたの、そしてすべての女たちよ、その声音さえ知らず、ひそかにすばやくどこかの街角でものにした女たちよ。彼はこの女からあの女へと寄り道してしまい、女たちを相手に何年も何年も費やした。それから、嵐の水の焰が彼を最後の女へ向けてほうり出してしまったのだ、歓喜の現身、女丈夫、キューテラ島のキルケーだ。

この女については、思い出は自惚れるほどのものではなかった。手練手管の女で、言い寄られ誘われると、気を持たせて相手を夢中にさせた。陰影のあるふくやかな肉体を差し出して身をまかせるか

なという度に、叫びを上げて突き飛ばすか、腰をぶるつと震わせて身を離すのだった。彼女はついに弱気になったオデュッセウスをめるめろにして、やすやすと自分に縛り付けてしまったのだ。

徐々に、彼は規則正しく港へ下って行くことを止めた。

彼は朝遅くに起きると、ラフィア椰子のカーテンが陽の光を篩にかけ、部屋は半透明の青い涼しげな陰からできた水で満たされた泉のようであった。外では、風の手がざくろを打ち鳴らしていた。

手を左の方に少し伸ばして、彼はキルケーの裸体に触れる。

時折、彼女は彼を漁師のところへ、新鮮なムール貝とか、腐ったトマトに似てはいるが恋の匂いのする『はや』を買いにやらせたりした。

ある時彼は、水の滴るしょっぱそうなその海の幸で両手を一杯にして帰る途中、ポチアデス親方と会った。竈小路を通って彼を避けようとしたが、駆けてきて服の裾を掴まれた。

「おい、友人、ずいぶん久しぶりじゃないか。みんな待つてるぞ。リディアは毎日聞いてくるし……」しかし、ムール貝の匂いがかいで、目線をオデュッセウスの手に落とすと笑いだした。

甲高い笑いだった。

「ああ、そうか……」と言ったきりだった。

それからオデュッセウスの腕に触って、

「何かい、彼女は殻を親指ではじくっていつもそいつを食べるのかい。どうなんだい。それで青い葡萄の実といっしょに食べるのかい。」

「い」彼は溜め息をついた。

「あばよ、友人、いいかい、少しは降りてこいよ、出来たらでいいから。出来たら、と言ってるんだ。これ以上は言わないよ」

キルケーの家のある丘は、殆ど半島のような尻を突き出していた。海岸から百歩の棕櫚の茂みにある井戸が船の給水場になっていた。天候の穏やかな時には、小さな湾は帆船や小舟で一杯になった。何艘かが、ゆらめく海の端から、航路を曲げて、岸に着いて樽に水を満たすのが見えた。

真水が穴の底に眠っていた。ロープの先で手桶が揺れながら、苔のはえたなかを長々と昇ってくる。

桶が浮かび上がってくると、綱を引いた者は、誇りに満ちた笑みをもらして汗を拭った。キルケーはこの水のように冷たい水を好んだ。オデュッセウスは、毎日、壺二杯ほどこの水を汲みにきていた。

それがその時は、縁石のそばに、メネラーオスの革袋のあるのが見えた。メネラーオスがくれるはずの思いがけない知らせを、オデュッセウスは心の内で楽しみにした。再会したメネラーオスはずんぐりと、まぐろのように油ぎって、満ち足りて、トロイアの城壁のもとで剣を握った彼を衝き動かした、あの苛むような熱気を失っ

ていた。彼は目下ヘレネーを思う存分自分のものにしていった。幸福の油が一条、眼から流れていた。しかし、彼は今を嘆き悲しみはじめた。戦争から帰還してからの彼の生活は、かつて歩哨の塹壕で、夜、夢にかいま見たあのエリュシオンの楽しい生活ではなかった。それどころではなく全く反対のものだった。留守のあいだに、他の男たちが財産の大半をせしめていた。彼が、王たる彼が、傲慢な百姓ども、かつて良き時代には彼の前で睫毛さえ上げようとしなかった者どもと苦々しい争いを起こしたのだ。若い奴らが無礼にも彼の愛人の門をこじ開けようとしていた。いなご豆のひとつかけらのように小さな褐色のアジア人の女を、彼はヘレネーを恐れてスパルタの町外れに囲っていたのだ。

彼はとうとうぼつりぼつりとペーネロペイアの放埒な行状をも語りはじめてしまった。オデュッセウスはすぐには自分の耳を信じなかった。言い淀むメネラーオスを質問責めにした。メネラーオスはオデュッセウスにも知らされているものだと思っていたのだった。話を取り繕おうとしたが無駄だった。結局、彼はすべてを語った。何人も恋人を、若い者たちを引き入れ、そして年とって、アンティノオスとかいう輩に惚れてしまい、金を巻き上げられ、ペーネロペイアはそいつと一緒に富んで財産を食いつぶしていたというわけだ。テレマコスには、辛うじて食っていきけるだけのしか貰えず、父親の消息を求めて野山を駆け巡ったが、飽き飽きして、自分と同じ年齢の小馬鹿なものたちと一緒に生きていこうと、最悪の冒険に

出ると堅く決心している、と言った。「相身互いの運命だな」と、メネラーオスは締めくくった。

「相身互いの運命だと。相身互いの運命だと。言うはやすしだ。でもどうして俺が。冗談じゃない。そうだ、豚はどうなった。もし俺がそいつを見付けたら、そいつに……」

籐の笥で彼は自分のまわりのまつむし草を薙ぎ払ってまわった。アルゴスの殺人の思い出は、まだその哀しい歌がうたわれており、後々まで彼にいろいろ考えさせた。嘘の詰まった頭陀袋のうえに片時も離さず恐怖を抱いていた。あのアイギストスが暗い廊下で待ち伏せに遭った光景が突然目に浮かんできた。自分自身が豚みたいに喉を掻き切られ、血塗られた花の茂みに命の散る姿が見えた。ペーネロペイアのことは金輪際望みが無いと思った。するとその時、ペーネロペイアがこの世のありとあらゆる美しさを身につけた。

キルケーとの寢床のなかでそれからというもの、不愉快な影に苛まれた。キルケーのそばで目が冴えて、残酷な生が暗闇をうごめいた。オデュッセウスには自分の妻とアンティノオスが恋のあまやかな営みに呻き声をあげているのが見えた。

自分の足音の軽やかなリズムが少しは慰めになった。彼は幾つも谷や森を抜けて痛みを和らげていた、そのたび毎にアルキノオスが茂みから飛び出してきた。仲間を求めてやって来たのだ。彼はイタケーの出身だから、魔術世界の虜にならなければ、オデュッセウス

と同じ記憶が脳裏に詰まっていたのだろう。

彼らは丘の反対側で寝そべり、彼らの前にしゃぐまゆりの野原があり、島の中央は丸みを帯びていた。穏やかな空気がすずめたちの飛び交うなかで響いており、洗濯する女たちの声が空の平らな水面を切って飛んでいたし、野笛の牧歌的な響きが木々のざわめきのなかで震えていた。天上の静謐が野を漂い、オデュッセウスの痛みを癒した。

突然、海綿のように膨らんだアルキノオスから、息せききって夢想が撒き散らされた。押し殺された呻き声で、自分の神々について語った。オデュッセウスはそれを聞くたびに身震いした、がその言葉は彼を奇妙な国へ連れ去り、そこでは神々は大理石でできた通常の姿形とは別のものであった。

「ああ、あの方はわたしを見つめて、腹を引き裂いた。そして今や私の身体の内には全身に風がある。帆のようにぱたぱたと鳴っている。私の眼は海鳥でいっぱいだ。

……

羊飼いの女、ほら、海の雌羊の羊飼いの女だよ。いつも齒の間からしゅうしゅうと音をたてている。聞こえるかい。しゅうしゅう音をたてているんだ。太鼓を叩くように海を叩いているんだ。

……

—— 海。ひとたびそれが汝をその衣に包み込むならば……海は雲の覆いにむかって腰をたぎらせて踊り、雲はとても熱い海にしが

みつく」

そして、その泉の水管の下で、オデュッセウスはすこしずつ満たされてきた。

かつて、彼らは港の入り口を望む岩場によく出掛けた。自分の辛い人生の傍らに、他の様々な人生のすり抜けるのを聞いた。見習い水夫たちは潜って魚を捕り、エジプトの水夫たちが通りで言い争っていた。へ海のエロスンの店先ではリディアが漁師たちに呼び掛けていた。ヴィーナス号は艫に風を受けて、沖に向かっていった。その後ろには油を流したふうに髪のような筋が広がった。

巨大な海原のむこうの水面にイタケーがあった。

こうして、それから、彼は好んで船が沖から岸へ着くところ何度々やって来た。彼の目は大きな船の、泡立つ波の航跡を追った。自分もイタケー船の艫の鋤で、不毛な水面をよくも穿ち掘ってきたものだ、想像でをさらにその艫の鋤を鍛えあげた。

夢で彼は帆を広げ、航路の歌の拍子をとりはじめた。影のフルートが唸り、その唸りの陰に、かげろうの漕ぎ手たちが背中をたわめていた……「さあ、ともに櫂を漕ごう」……幻の船は胸先を沖に振り向けた……その翼……泡立つ海……風……そして穿たれた波間と盛り上がったこぶ……その翼……泡立つ海……出発だ。出発だ。

ああ。出発するとたちまち、偽りの艦船は姿を消した。

彼はもつとたしかに手に触れることの出来る船体が欲しくなつて

しまった。古い友人達のことを思った。船長《暗闇のダンス》、ポチアデス、がっしりした大帆船のすべての親方達。

彼はある日の午後、港にやって来た。岸壁に帆船はいなかった。

小舟がただ何艘かと、青い波のキュプリスの神殿へ大理石の塊を運ぶ大ボートが一艘いた。彼が尋ねると、

「船長《暗闇のダンス》は、新月になってすぐにマイアンドロスに向かつて航海に出ました。ポチアデス親方は海賊稼業に出てます」と、返事があった。

彼は倍加した欲求に腰をたわめ、崖を上った。

何日かの後、草叢で待ち伏せていると、港の前で一隻の帆船が係留されるのが見えた。ヴィーナス号だった。女たちの囁声がそこから立ちのぼり、また単調な歌の切れ切れが、樹皮を張った太鼓で打ち鳴らされたようであった。大マストに吊された編み籠のなかで、黒人の女が一人ぶらぶらと揺れていた。彼女が歌っていた。緑の毛の玉房を巧みに操っていた。

オデュッセウスはへ海のエロスへに入った。ポチアデス親方がいて、お気にいりの隅のテーブルについていた。彼の肩の上ではインコが羽根をばたつかせていた。

「やあ、何かしようよ、暇だったら」とオデュッセウスは言っ

た。

言われた相手は見るともなく目を上げた。柔らかな指の間でパン屑を捏ねていた。

「オスレットでも一勝負どうだい」と彼は言った。

もう自分の望みを抑えずにオデュッセウスは言った。「いや、そうじゃなくて、航海に出よう。ちょっとした航海に。むこうの岸まで俺を連れていってくれないかな。あつと言う間に出来る事だから」

ポチアデス親方は苦勞して眠気で膨らんだ両の瞼を持ち上げ視線を真ん中にすえた。

「コールタールを塗りたくられたらばのようだぞ。おまえさんは自分が何かに取り掛かると急いで走りだすということを知っているか。それでキルケーをどうするつもりなんだ、連れて行くのか」

「いや、キルケーは置いてく、終わったんだ。足りないのは女たちじゃない」

「ああ、それだ、それは本当だ。言わせてもらえば、黒人女に優るものはない。僕は、今度、船倉一杯連れてきたぞ。暑さ真つ盛りよのときのメロンのように売っぱらっちゃったがね。帰りにあちこち港に寄っただけで売れてしまった。そのうち二人はトルチュ島のパン屋の爺さんに売っちゃった。奇麗な奴ふたりをな。それで、そのことを話すのはだな、よかったら最後の一人を売ってやるってことよ。出掛けることなんかないよ。それで、その女といっしょにいれ

ばキルケーも来るだろうし、虎みたいにその女に噛み付いてみせるぜ。ゼランドって言うんだ。ゼランドを売ってやろうか」と、大口を開けてあくびをしたポチアデスが言った。

「いや、その女を見たけど、緑の玉で遊んでいた女だろ。その女には用はないんだ。あっちの岸まで連れて行ってくれ」オデュッセウスは言った。

それではじめてポチアデスは目を覚ました。そして彼は言った、「そうはいっても、それは、それはおまえさんの都合のようだ。

いいかいそこだよ、僕には関係ないんだ。もうこっちの計画は出来ているんだ、いまさら変えるとなると、丸損だよ。このところみんな黒人女にかかずらわっているし、抜け目のない奴らは、聞くところによると、やりたい放題エジプトの海岸で黒人女を集めているんだ。集めに行けよ。今こそ僕がたぶん船乗りをやめる良い潮時なんだ。あと一航海こんなふうにして、それでヴィーナス号を売つばらちまうんだ、館を一軒買つて、そこには立派な一本のマスト、糸杉の木があつて、まわりは一面のういきょうの海だ。だから……」しかし彼は一時夢見心地のままであつた。

「そうでなければ……たぶんお互い納得がいくかもしれない。でも、人それぞれ都合つてものがあるからな、そうだろ。僕には帆長がいて、そいつはふくらはぎに弓が刺さっているんだ。傷が膿んで、臭いがひどいし、いつもうんうん唸っている。意気地のないやつだ、それで船から降ろした。あいつの代わりになつてくれない

か、エジプトからの帰りに、向こう岸まで連れてくよ」

最後にオデュッセウスが言った「そうかい、そりゃ有り難いことだがね、でも俺がヘラスでしようとしては待つてはくれないんだ。それがなきや、喜んでそうするさ、わかつてくれ、誓うよ。まだ他にも方法はある、つまりこうだ、あんたには人が足りない、そいつは俺が連れてくる。おまけに、まるごとあんたにそいつを任せるよ。そのうえ、そいつには金を払わなくてもいいんだ、あんたの思いどおりに信じこませればいいんだから。ただ喰う分だけやつてくれれば」彼はポチアデスの方に体を曲げて、耳元で言った、

「それにあいつは独りだ。へまをしでかしても、かみさんやら、母親やら、笠貝のようにへばりついて、『金、金』と叫ぶ奴もいない」

ポチアデスは拳でテーブルを叩いた、

「そういうことなら飲んだり喰ったりしてる暇はないぞ。そうしてくれらんだったら、今夜にでもあっちの岸に連れて行ってやるよ」

オデュッセウスはアルキノオスのあばら屋まで登っていった。アルキノオスは見つかつたが、さも聞く耳を持っている者に語りかけるかのように、小さな雲に話しかけていた。



「さあ、立って、おい、すごい船に乗り込むぞ」とオデュッセウスは言った。

ポチアデスは道の端で待っていた。夜になっていた。

「あんたに言っていた男も来たよ。ロープを縛ることにかけては右にでる者がいない、秘密の結び方を知っていて、誰も解けないんだ。オール捌きも、あの腕を見てくれ。あいつは奇妙な力を身に秘めてる、神々が見えるんだ。トリトンの群がどこに棲んでいるか教えてもらっているから、あいつの言うことを聞いていれば、海のこととがもつとよく分かるはずだ」とオデュッセウスが小声で言った。

一本マストの帆船が、明るい夜のなか、給水場の前の海を遊弋し、ポチアデスの呼び声に、航跡が弧を描く。帆船は三人の男を乗せ船体を揺らして出てゆく。艫に風を受け、舷燈の赤い光が赤毛のようにたなびいていた。

どうぞご無事でと言う別れの挨拶の音が、灰色の海に散らばったあらゆるはしけからあがる。

船首に立ったポチアデス親方は重々しくすべての者に応える。憐憫の心のこもった声で唸った、

「汝の怒り、海よ」

というのも、人々の祈りは何らポセイドンの拳と対決するものではなく、あなたたちを畏れていると神々に思わせようとする、とにかく狡知に長けたものだった。そしてポチアデスは席から降りて、

何人かの乗組員の尻に蹴りをみまい、ゼランダの差し出すブリキの杯を一飲みした。そして行く手の海路を見張っていた。

島の沿海を抜けると、潮の流れが船の舵に激しく襲いかかった。

ポチアデス親方は跳ね回る舵棒を踏ん張って支え、騒ぎ回る牡山羊を手懐けるように、急激な舵の動きを制した。彼の肩では、インコが羽をばたつかせていた。

オデュッセウスはこの元海賊の友人に半分疑心を抱いていたので、彼の近くに寝て、船足を見守った。